京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（3 年計画の 1 年目）

1. 研究課題

「日本の伝統文化」を問い直す

Rethinking Japanese Traditional Culture

2. 研究代表者氏名

重田　みち

Michi SHIGETA

3. 研究期間

2020 年 4 月-2023 年 3 月(1 年目)

4. 研究目的

明治期以来「日本の伝統文化」の重要な一翼をなすものと位置づけられ、紹介されてきた芸道文化―茶道・能楽・花道・蹴鞠等、及びその空間を構成する建築・庭園・絵画・器物等の文物―は、実際のところ、中世以来の芸道文化の実態を忠実に反映してはいない。①「日本」文化とは言っても実際には大陸文化的性質が強い、②芸道文化を規定してきたとされる「禅」文化にしても、実際のところ様々な思想的・文化的要素から複雑に構成されており、単線的な影響関係を想定することが困難である、③欧米に対抗するために近代日本が要請したのが「伝統」という権威付けであり、結果、芸道が古来変わらぬものであるかのような静態的な印象を仮構している、等々の問題点である。そのような理解によって不可視化された芸道の様々な面に着眼し、あらためて歴史的・実証的な考察を加え、近代以降の理解を乗り越える視座を獲得することを本研究班の目的とする。

5. 本年度の研究実施状況

本年度は５回（うち１回は３月開催予定）の研究会と１回のシンポジウムをした。芸能史、美術史、音楽史、禅思想史などの分野の研究報告のほか、基本文献の会読、方法論的検討などを実施した。

6.本年度の研究実施内容

2020-05-31　問題提起「日本の伝統文化」とはどういうものとされてきたか：鈴木大拙と久松真一の著作をとおして 発表者 重田みち 京都芸術大学　コメンテーター 古勝隆一 人文科学研究所

2020-07-19　リーディング：宮本常一・村井康彦・守屋毅「共同討議：雑談」　発表者 菊地暁　日本中世の諸芸と道学―発端としての世阿弥能楽論 発表者 重田みち 京都芸術大学　コメンテーター 福谷彬
2020-09-13　1937年パリ万国博覧会における「日本の伝統」を考える 発表者 高階絵里加 コメンテーター 宮﨑涼子 京都芸術大学 茶禅一味説をめぐって 発表者 神津朝夫 立命館大学　コメンテーター 佐々木 孝浩 慶應義塾大学慶應義塾大学斯道文庫
2020-12-06　『宗鏡録』の成立と伝播：中国禅による仏教の統合と日本への影響 発表者 柳幹康 花園大学　コメンテーター 古勝隆一　近世音楽芸能における異相と外来文化 発表者 竹内有一 京都市立芸術大学　コメンテーター 今枝杏子 神戸女学院大学
2021-01-10 シンポジウム：「日本の伝統文化」を問い直す 漢字圏古医籍の定量・比較研究――その異・同と社会経済背景 発表者 真柳誠 茨城大学 日本絵画の向こう側――中国絵画史からの視点 発表者 宮崎法子 実践女子大学 異文化として日本を眺める――ヨーロッパ近世の眼差しとキリシタン時代の布教活動 発表者 シルヴィオ ヴィータ 京都外国語大学　司会 重田みち 京都芸術大学　司会 古勝隆一
2021-03-21　室町時代後期に何故絵入り冊子本が登場したのか？　　発表者 佐々木 孝浩 慶應義塾大学　コメンテーター 王孫 涵之 京都大学文学部 中世の巡礼僧と民衆社会―可能思想としての外来仏教― 発表者 上川 通夫 愛知県立大学　コメンテーター 菊地暁

7. 共同研究会に関連した公表実績
2021年1月10日ウェビナーシンポジウム「「日本の伝統文化」を読み直す」を開催した。

8. 研究班員
所内
高木博志、菊地暁、岡村秀典、稲本泰生、古勝隆一、福谷彬、高階絵里加
学内
成田健太郎（文学研究科）、陳佑真（文学研究科）、王孫涵之（文学研究科）
学外
佐々木 孝浩（慶應義塾大学斯道文庫）、上川通夫（愛知県立大学日本文科学部）、水口拓壽（武蔵大学人文学部）、外村中（ドイツ・ヴュルツブルク大学）、井上治（京都芸術大学）、柳幹康（花園大学）、シビルギルモンド（ヴュルツブルク大学）、今枝杏子（神戸女学院大学）、西谷功（泉涌寺・心照殿）、神津朝夫（立命館大学）、ガリアペトコヴァ（関西学院大学）、田中健一（文化庁）、竹内有一（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター）、宮崎涼子（京都芸術大学）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	外国人	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
学内（法人内）	1	8		2	2	1	25		6	6	3
国立大学		0									
公立大学	2	2					6				
私立大学	7	9	1	1	1		28	3	3	3	
大学共同利用機関法人	0	0									
独立行政法人等公的研究機関	1	1					3				
民間機関	1	1					3				
外国機関	2	2	1				7	3			
その他	0	0									
計	14	23	2	3	3	1	72	6	9	9	3
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

第２年度にあたる次年度は６回の研究会を開催し、美術史、書道史、芸能史、科学史、禅宗思想史、儒教思想史などの分野における伝統形成の批判的検討を行い、東アジア・スケールの比較史的視野を導入しつつ、「日本の伝統文化」をめぐる理論的、実証的知見の整理を進める予定である。同時に、能、狂言、茶道、華道、作庭、建築など、「日本の伝統文化」を構成する諸ジャンルに関わる基礎文献の講読も行う予定である。また、最終年度に予定している成果報告シンポジウムの開催ならびに報告書の刊行に向けて、国内・海外（渡航可能になれば台湾、中国、韓国等）の研究者との打ち合わせ、関連アーカイブの見学・調査等の実施を予定している。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	5	20	200000
	一般旅費	2	2	60000
海外旅費	渡航旅費	1	1	60000
	招へい旅費	1	2	150000
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				100000
消耗品等経費				100000
その他				30000
合計				700000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

最終年度終了後の研究報告刊行に向けて、準備を進めていく予定である。